
二二一〇

美山英則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二二二〇

【Nコード】

N1463M

【作者名】

美山英則

【あらすじ】

この小説は、SF小説ですので、宇宙人は、1625年から、中国に登録した、その後、地元の言語を習った、自分の星へ帰った。その時、宇宙人達の星も、戦争して、ハイテクや文化は、ほとんど壊滅した。

2210年、彼らは、もう一度地球へ戻た、地球人は、みんな同じ言語を使いうと思っている。面白い誤解や、ユーモアも発生しました。

あとは、僕、外国人なので、文法が間違いはいはい、いっぱいあるか
もしれません、ごめんなさいね！

第一回：出来た（前書き）

この小説は、SF小説ですので、宇宙人は、1625年から、中国に登録した、その後、地元の言語を習った、自分の星へ帰った。その時、宇宙人達の星も、戦争して、ハイテクや文化は、ほとんど壊滅した。

2210年、彼らは、もう一度地球へ戻た、地球人は、みんな同じ言語を使いうと思っている。面白い誤解や、ユーモアも発生しました。

あとは、僕、外国人なので、文法が間違えばいい、いっぱいあるかもしれません、ごめんなさいね！

第一回：出来た

第一回：出来た

西暦1625年5月30日午前8時（GMT+8）、中国、北京：ある物は、空から、突然、出来た。あれは、丸い金属皿みたい物なんです、でも、絶対に大きい物だ、半径は、約100メートル以上だ、こんな物を、段々着陸しています…

その後、大爆発します…

6百年後の現在、西暦2209年、同じ大爆発が発生しました！今回は、北京じゃなくて、大阪だ！

11月26日午後9時（GMT+8）：

巨大な宇宙船が、出来た！6百年前と同じ宇宙船だ！この町の人々は、怖くて、嬉しくて…気持ちさが、凄く複雑だ。

これはですね、初めて、宇宙人の存在の証拠は、もう十分です。人間の一人の皆様は、勿論気持ちだ。

宇宙船は、町の上にドリフトしています、着陸しません、ずっとドリフトしている。その間、人々は、大量に、大阪に来ます、科学者も、一般人も、皆ヴィ互いに大阪へ。

皆宇宙人の姿を、見たい、宇宙人と話したい。

だが、26日から、今は、もう12月1日、宇宙船は、ずっとそのまま、着陸しない、ドアも開けない、政府は、ずっとヘリコプターで、宇宙船の周りに、話しています、宇宙船は、返事しなかった。人々は、段々元の所を戻している、でも、一部分好奇心が凄く強い人たちは、残ります。

そして、12月12日、朝5時、宇宙船は、動きます！

みんなは、ニュースで、このニュースを知った、宇宙船の近くに集まっている、宇宙船は、着陸しました！

ドア、ゆっくり開けています、みんな息を止めて、待っています…

宇宙人は、出来た！

宇宙服を着て、小さくて、約1.5メートルぐらい、まるでハリウッドの映画の宇宙人だ！

三上恋、年は、また13歳、考え方は、まるで30歳の男みたい女の子は、こんな状況見た後、すぐアメリカの友達に電話して、その時、宇宙船から、6人の宇宙人は、ゆっくり出来ます。

「Ryan, I have big news! Aliens out!」

カリフォルニアに行ったライアンさんは、凄く興奮している：「Oh really? How your feeling?」

「It's cool! I think, maybe aliens want talk to us...」

「Yeah, right...」

第二回：中国語で話しています

「Your killing me...」

「No! I'm serious!」三上は、真剣に語った。

「But... it's impossible!」

宇宙人は、初めて、地球人に交流している、彼は、ゆっくり宇宙船の前に：「大家好、我？是来自比？星系的人、我叫做李？、由于...」
「嗚呼、宇宙語だ、どういう意味ですか？」人の群れの中で、ある人はとても納得できないで、完全に聞いて分かりません。

「そつだよ、恐らく、宇宙人たちは、地球語を分からないんだよ。」
「そつだそつだ...」

ある人、非常に驚いて、これが本当ですを信じます勇氣がありません。
ん。彼は、独り言を言つて言う：

「いいえ、これは、宇宙語じゃねえ、中国語だ！でも、なんで？いったいどういうことですか。」彼は、凄く戸惑だ。

「You mean, that's not alien language, it's just Chinese?」恋ちやん凄く驚きます：「あり得ねえ！」

彼女は、信じられないんだ。

宇宙人は、中国語で、話している、それに、続けています、日本には、1%の人は、分かります、彼達は、中国の留学生や、大学で、中国語勉強した日本人もある、その他の99%の人々は、さっぱり分からねえ。

宇宙人たちは、恐らく、地球で1種の言語だけあると思っています。

第三回：地球中心：大阪

半日後、大阪と近い街には、このような音は絶えずに耳に入ります：

「すいません、中国語が分かる？」

「失礼ですが、あなたのご専門は、中国語でしょうか？」

「あとう、誰か、その中国語の……」

こんな話いっぱいあります、すぐ、ただ大阪じゃなくて、全日本、全世界だ。

宇宙人たちは、まだ分からなくて、この世界は、一つ言語じゃなくて、2000以上の言葉だった。

同日、12時頃、世界で、多くの人は日本にどっと集まります。いえ、日本じゃなくて、大阪だけだ。市役所と政府は、臨時ビザを発給します！彼達は、50%以上は、中国語の専門家と中国や台湾も来た中国語を分かる人達だ。

それで、大阪は、たちまち世界の焦点に成る。

宇宙人は、ずっと話しています：

「……我？的星球距？地球4・1光年，地球上的600年前，我曾？来？……」

「……私達の星は地球4・1光年まで、地球の上の600年前に、私達はかつて来たことがありました！」大阪外国語大学の深山嘉治は、通訳しています：「我々は平和のために来ます。600年前に、私達の宇宙船は地球の上で事故を起こして、パイロットは運良く脱走して、帰って星に近くにあった。それから、私達の星は侵入されました、ほとんど人種は壊滅して、私達の科学技術は余すところいくばくもなく、自分の言語は完全になくした。唯一地球から連れて帰って、あなた達の言語、そのため私達はずっと今なお使っています……」

「当？学？地球人的？言？在我？星球是非常流行，以至于人？之？互相交流也使用？？？言。最后，？争？生了，？幸存活下来的人

「？　？　？　忘？　了自己的母？　？　后重建的文明　失去了我？　的？　言：」
つて、長い時間で自己紹介している、最後、宇宙人は：「我希望我
？　能？　和平共？　？　？　大家。」と言いました。

恋ちゃんは、中国語のことを全然分らない、周りの通訳者の通訳
結果は、彼女よく分かります！

「なんだ、600年前、彼達は、地球に行った、その時、登録場所
は、中国だった、だから、中国語をを使う。その後戦争を暴発、自
分の言語を忘れた。」彼女彼女は独り言のように言った。

第四回：如何すればいい？

「あり得ないだろう？自分の言語を忘れて…」

「可能ですわよ！」恋ちゃんは、返事している：「エジプト人は自分のエジプト語を忘れて、アラビア語を使う。だから可能だわ。」

「まあ…」嘉治は答えます：「確かに…」彼は側の恋ちゃんを見て：

「ああ、私は、深山です、君は？」

「み…三上です。」恋ちゃん答える：「って、今は、如何するの？」

「何が？」

「人間、我々地球人達、如何すればいいかしら？」

「これは、まあ、恐らく、人間はね、二度と前ようなことができない、政見が合わないでお互いに惨殺したためだろう。」

恋ちゃんはちよつと笑って頭を振って、答えていない。

宇宙人は航空宇宙を身につけていて従って、だから彼らの顔立ちを知らないで、しかし、体つきは人類の児童と類似します。こんなに長い時間、宇宙人は偶然飛行船を出て行って、あちこち見てみて、それから更に帰ります。

12月16日（GMT+9）：

宇宙人はすでに20日来て、国連は代表団を派遣して、疎通を行うことを望みたい。

13時、代表達は飛行船に上がります。

その時、恋ちゃんは、買い物したい、ある所、もう一度深山と、出会います。

「ハロー」

「ああ、お前、確か…三上さん？」

「はい、どうしてこんな所に…」

「いあ、その…買い物したいと…」

「ああ、そう、実は私も、箱を買いたい。」

「えっ？そうか。じゃ、気にしないなら、一緒に、どう？」恋ちゃ

んは、話している。

「も…勿論。」深山は、ちよつと予想以外だ。
カルフルスパー：

「あんたは、若いですね。」

「そうか？あたしは、今年13歳、2196年に、あなたは？」

「俺は、もう二十歳だよ、2189年に生まれた。」

「そう、お仕事は？」

深山は答えていないで、指の包みの中の1冊の本を使います。

「詰まり、あなたは、大阪外国語大学の学生、専門は、中国語？」

「ええ、まあ。」

「へえ？凄いじゃあ、あたしに教えて、お願い！」恋ちゃんは、言います。

「ああ、まさか、あなたは、宇宙人と話したい？」

「当たり前だ。」

「分かった、これは、僕の携帯番号と、MSNアドレス…」

第五回：停電の真相

12月21日、木曜日（GMT+9）：

大阪国際交流センター：

大きい雪の日、而も、地球は新しいひとつの小さい氷河期に入って、温度は急降下します。ただ零下10度だ。

みんな寒くて、センターに集める。

「最近、このセンターには、中国語の専門家が、いっぱい居るんだね。」

「ええ、これ以上、大阪には、外人、宇宙人、みんなここに集めるんだ。」

「まあ、それで、国連の代表団は？」

「恐らく、相談中だと思うよ。」

「ああ、これ以上、みんな中国語を勉強して、英語の地位恐らくさえ上回られたと思う。」

「仕方ないわ、600年前、宇宙船は、偶然中国に登録した、而も、宇宙人達は、自分の言語も忘れた。」

「ええ、可哀相ですわ。」

二人女の子は話し合っています。

突然の停電、センターには、真つ暗だ。科学先進の時代、殆ど誰も懐中電灯を持っていない。当り前さ、日本は、もう50年以上停電して発生したことがなかった。

この時、有る光芒は人の群れの中から照らし出来た。あれは、懐中電灯の光だ！懐中電灯を持っている少年は：

「みんな、騒ぐ無いて…」

何分後、電力は回復した。

みんなの静かになった。

その時、恋ちゃんは、ちょうどセンターに行きます。入口まで、懐中電灯の少年が電話をかけていることを見て、情緒はとても感動し

ている：

「どういう事だ！」

恋ちゃんは、そつと尾行します。

「…何が申し上げございませんだ、分かるか、あんた達のせんは、停電だよ…だから、言つたろう？日本は、もう50年以上停電しなかつた！へえ？範囲が？全国だ！ただ大阪じゃない…」

「停電？」恋ちゃんちよつと分からないんだ。

「そうか、確か、先…」彼女は、思えました：「詰まり、先の停電は、こいつと関係があるの？」そう考えた。

引き続き尾行して、彼女はまた彼の音を耳にした：

「とりあいず、このまま、他のは、私に任せて…」話し終わった後に、彼はタクシーに乗って、Aももう一台タクシーを叫んで、追つて上がっていきました。

第六回：懷中電灯の少年

車は1か所の辺鄙な倉庫で止まって、懷中電灯の少年が下車した後に、歩いて入っていった。この時、出てくるその他の何人かの人、彼らは小さな声で何を言っています。

恋ちゃんは、講談の内容は、聞こえない。少しいくつか間近で、ついに彼らの談話を耳にした：

「??在?什??西?跟?????那玩意儿不可以弄 会出事的!」
懷中電灯の少年は言った。

「不是 不然我?没法成功?在不是很成功??」一人で釈明した。
「成功???知道代价??」

「我?当然知道。」

「知道什??全日本大停?!??知道??」

「我:我想不是全日本 是全?洲 至少??。」

「什??!」

：

「くそ!どういう意味ですか?「停?」は停電か?ああ、分からないんだ。」恋ちゃんは、困るんだ：「そうだ、彼に、電話しよう!」

深山に電話をかけます：

「もしもし?」

「どちら様?」深山は目が覚めていない。

「速くこっちに行って!」

「何だ?俺は、忙しいなのよ、今朝の停電が、いろいろなデータを壊れた。」

「あたしは、真相が分かるんだ、停電の。」

「本当?じゃ、何で?」

「だから!速くこっちに行って、場所は...」

「...もう分かったよ、たく...」Bはいらいらして服をちゃんと着て、出来た。

深山はその倉庫に来て、恋ちゃんは彼に原因を説明した。

二人は、こっそり聞きています。

「没什？好？的了，既然道不同不相？？」。「あの人たちは懐中電灯の少年を捉えて、持っていくつもりだ。」

「待ちなさい！」恋ちゃんは、突然突進して行って、彼らに向かって叫びます：「彼を放せ！」

この時、彼女は中国語を話すべきだと思い付いて、残念ながら後ほど深山を見ているほかないんだ。

深山は、すぐに出ます：

「放？他！」

「？？？是？？！」

「？不重要，？快放了他！」

「要是不？？？」彼らは人の皮の偽装を脱いで、正体を現した。

「？……？？是外星人？」

「？在知道也？？不？」

「？什？要？？做？是？？造成了今天？次停？的，？？？」

「不？，怎？？？」

「我要知道？什？」

「？什？？？会明白一个？受？乱，？源短缺的星球的人的苦？？？跟？？？了？？也不？」

「？不？怎？知道不？？？」

「？？？一个星球上就有？？多？？言，？？互相之？都不能听？，要我？怎？解？？」

深山は恋ちゃんをちよつと見て、頭を振って、言つて：

「？？？，既然？能用我？星球的？言，那我？一定能理解。」

その後、宇宙人達は深山を始めてと釈明して、彼らのしゃべるスピードはとても速くて、恋ちゃんは完全に聞き取れないで、この時に彼らは意外にも懐中電灯の少年を放しました。みんなは一緒に座つて探求しています。

第七回：真相

車は1か所の辺鄙な倉庫で止まって、懐中電灯の少年が下車した後に、歩

いわゆる「探求」、実は恋ちゃんは完全に分からない。2時間をこのように過ぎました。話し終わった後に、恋ちゃんは深山と一緒に歩いて戻ります：

「って、どういうこと？」

「長い話だ、」深山はため息をついた：「悲しい星だ、宇宙人達住んでいる星は、戦争の苦しみをひどく受けます。」

「ちよつと待って、宇宙人達の話は、あんた信じているの？嘘じゃないの？」

「ああ、確か、あんな可能性もあるんだ、だが、彼達は、証拠があるんだ。」

「えっ？何の証拠？」

「それはまあ、ヒーミーツー」

「ヘエー教えてよ！」

実際には、深山の言うことを承知しない原因、別にこんなに簡単でなくて、宇宙人は彼に教えて、1ヶ月にならなくなった後に、彼らの星の統治者は資源を奪い合うため、地球に進撃することが始まる、とても怖い真相だ。深山は、すごく緊張だ。

災難、間もなく来ます。

一方、懐中電灯の少年の正体は、北川光石、映画の制作者だ、父はアメリカ人、母は、日本人。以前は映画を作って、すべてソフトウェアを使って必要とするシーンを作るので、今大脳の想像を使うので、それからコンピュータの中でダビングします。彼は、こんな映画創造者だ。

「Dad, where you going?」光石は聞きます。
「Back to United Nations, The f

inal destruction of a nuclear
North Korea.”

“You can't do that!”

“Why?”

“Because... That's last nuclear
weapons...”

“Look, I know you like North K
orea, but... If you have more
love for the earth, love of ma
nkind. Should support the elim
ination of nuclear weapons, ma
nkind's last, forever eliminat
e hidden dangers.”彼の父は言った。

“I love humans, and the earth,
precisely because of this, it
cannot be destroyed.”

“What are you talking about? T
wo hundred years, humans have
been concerned about the destr
uction of nuclear war, has now
come to an end, and why?”

“Just don't do that, that's we
last hope!”

光石は、一生懸命で説明している。

“Oh, My God! How do I explain
with the United Nations?”

“I have no idea...”

“ただいま...” 光石の母は、帰った。

「お帰り」光石は：「お母さん、今日は、何を食べるの？」光石の
性格は、二重人格だ、今は、まるで子供みたい：「ねえ、何を食べ

るんですか？」

「それはね…母さんは…」光石の母は、野菜を買うことを忘れた。

「そんな！」光石はとても失望して、この時、電話は響きました。

「ああ、私の…」光石は電話に出ます：

「干嘛？什？！知道了、？上来。」光石は電話に掛かって、母に：

「ああ、ご飯は平気だ、僕は、友達の家に行ってきます！」、それ

と、父に：「I have to go, That thing

you think about it。」

光石は、出来た。

第八回：心配

「ああ、如何しようかな、父さんは、出来るか。もしできないなら、どうしよう！あれは、全人間の…いや、第一回宇宙戦争だ！人間の最後のチャンスは、北朝鮮か…」光石は、歩いて、考えていて、ため息をついた。

同時、深山も、すごく困る、そのまま、我々地球は、きっと壊滅だ！彼は、真相を恋ちゃんに、教えた。

「どう、どういう事ですか？まさか！」恋ちゃんは、全然信じられない：「もしそうしたら、人間は、お終いだ！」

「残念ですけど、恐らく、これは事実だと思う。」

「そんな！じゃあ、今、地球を救う方法が、ある？」

「私達唯一な方法は、恐らく、政府に、この二ユースを教える、もし政府達信じているなら、北朝鮮の核兵器は、我々地球人の唯一な希望だと思う。」

「よし、じゃあ、行こうわよ、市役所へ。」恋ちゃん言った。

「ちよつと待ってくれ、証拠が無いなら、政府は、私達の話は、信じているか？俺達、必ず速く証拠を探す、その後、政府に教える、一刻も速く！」

「はい、分かったわ、じゃ、行こう！」

「何？またウィンドウズ2208システムの問題？ああ、あんたはね…」光石は、ちよつといらいらした。

「如何したろう、あんたは、暇でしょう？」光石の友達山崎志智は言った。

「暇って、お前何を言っているの？俺はな…いいえ、こんなこと、あんたと言わないほうがいいぞ。」

「何のこと？ガールブランド？」

「そんなこと…まあ、ほぼ同じだ。」

「何がほぼだ、教えてよ、誰？誰の可哀相な女の子は、あなたに好

きになられたか？」

「あんたの妹だ。」光石は、嘘ちやつた。

「へえ？まさか、お前、本気か？」

「もちろん…嘘だ！はははは…」

「てめえ！」

光石は、また言いません、心から、地球の未来のことを、心配なん
でいます。

第九回：みんな分かって

深山、光石と恋三年は、凄く心配の時、ほぼ同時に、アメリカ政府も、嫌な感じも有った。あれは、不幸な予感だった。

アメリカ、バージニア州、マクレーン、中央情報局：

「Sir, we have information。」

「What's going on?」

「Today intercepted satellites signal, aliens maybe hostile to it。」

「What? Let me see that...」

...

「That's impossible! Are you sure?」

「Our informants are analyzing...」

「We have no time! The information that they would be January 3, 2210 go to war!」

「But we need to...」

「Come on! Let your team as soon as possible analysis, and then report to me。」

「Yes sir, Course。」

12月24日(GMT+9)、クリスマス・イブ、中央情報局予言な戦争の日は、あと10日。この日、もし普段通りならばが静かで、天守閣の上空、漂う飛行船、すでに見慣れていて少しも珍しくなくて、頭をもたげていつて見ることに人がいません。

深山は恋と一緒に街へ行つて、講談して言う：

「なあ、最近は、如何だった？」

「如何って…何か理解ができないんだ。」恋ちゃんは、答える。

「だって、宇宙人達は、地球に作戦したいでしょう、侵入は、何時？」

「あんだ、随分穏やかだ、怖くないの？心配しないの？」恋ちゃんは、質問した。

「いや、だって、いくらどんな怖くても、無用だろう？それに、誰も死ぬの日は、ある、だから、もし、これは、全人間の運命したら、平気です、私も、人間の一員だって。」

「そう…ですか？」

この時、突然、街頭、空爆の警報は響き始めて：

「みんなは注意してもらって、国連の最新の調査の表示によって、今度の私達を訪問する宇宙人、2210年1月3日あって、地球に対して大規模な進撃を始めます…」

「なに？」深山は、不思議な感じがあつた：「2210年の…」

「やっばり…」

韓国、ソウル：

「2210?1?3? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?
? ? ? ? ? …」

アメリカ、シアトル：

「This news is latest information
on from the United Nations . Space
aliens : on January 2 , 2210 .
..」

ベトナム、ホーチミン：

「Ch?ng t?i c?n ph?i ??? c chu?n
b? s?n s?ng ? ? l?m vi?c b?t c
? l?c n?o ?? ng?n ch?n s? x?m
l?? c c?a ng?? i n?? c ngo?i . . .」

ニュージーランド：

「We have no choose, we have to counter...」

中国、香港：

「在這一天到來之前，我們必須團結起來做好準備，抵禦外星人的入侵……」

ロシア、モスクワ：

「

...」

ただ今、全世界、分かった。2210年1月3日は、正真正銘な最後の審判の日、人間の運命は、その二百年前のアメリカ映画「インデペンデンス・デイ」(Independence Day)と同じでしょうか？

第十回：決死

翌日：

この世界で一番怖いニュースのせいで、みんな眠ることができなかつた。町には、特に静かになるんだ、人々は、怖くつて、泥棒までも、今日は、ほとんどいないんだ。

これは、人間の初めて、平和のクリスマスだと思います。

恋は、一人で、町に歩いていますが、急に、なにが考えた：

「そうだ、宇宙人は、来年1月3日から、地球に進撃することを始めて、彼らが今1機の飛行船だけあるため、その他の増援部隊を待たなければならなくて、ようやく地球に侵入することができます！」
その時、もともと、宇宙人は、地球の他の言語を分からないだ、でも、彼達は、凄く好奇心がある、だから、一生懸命で、翻訳しています、宇宙船に、キャプテンは：

「翻???果怎???了?」

「?出了一小部分、我?的?攻??被泄露了。」

「什???怎?可能?他?怎?会知道?」

「?、他?在全地球?行广播、我?必?提前行?。」

「知道了、?????。」

キャプテンは、窓の外を見て、それは少しためらっているが、彼は指示：

「明天早晨7点之前准?好、提前?攻!」

「遵命!」

その後、宇宙船のみんなはすべて忙しくし始めて、この時、1発のミサイルは宇宙の船に向かって飛びたちます：

突然空中で爆発した！赤の他人は次から次へと頭をもたげて上へ見て、ミサイルはべつに飛行船を打ち壊しなくて、以外にただ爆発するだけ。

「怎?回事?」キャプテンは、質問して：「?里出?了?」

「？ 是人？？射了？？不？不用担心 船体没有受？」

ペンタゴン：

「It's no work！」

「What's happen？」

「Sir, Targets remain。」

「Damn it！」

「Plan B implemented。」

「Yes, sir！」彼の表情から見抜くことができ、Bを計画して、普通でない計画。

この時、宇宙人は始まって飛行船の中から大量の戦機を派遣して、地面に対して掃射しています。

天守閣は打ち壊されて、大阪国際空港も運よく免れることができなかった：戦争は、続けています：

自衛隊は全力を投入して、勇敢なのは反撃します：

在日米軍も、進撃を始めた：

米国の本土の飛んで来る大量の戦機から、同じく間もなく到着します：

ロシアさえ増援します：

これが、全世界の戦争、人類の運命の戦争を決定して、始まりました！

第十一回：開戦

三時間後：

人類は死傷してすでに300万を上回ったことを数えて、部隊の損失は98%に達します：

宇宙船に：

「怎??了?」

「我方?失3艘?机?2人?死?6人重?。?方已?失300万以上?将近400万?他?的各路??死亡超?90%……」

「很好?就??保持?不需要?援我?也可以全?人?。」

「是的?官。」

キャプテンの得意げなのは笑い始めました。

光石の父はまた国連に報告することに間に合っていないで、戦争は始まりました。朝鮮の核兵器も用意し注目されます。

ニューヨーク、国連本部：

「Now we do not need to discuss the planned destruction of nuclear weapons, we should discuss whether the use of nuclear weapons against alien invasion。」

「If so, even the earth itself can be hurt, too close to the spacecraft from Earth。」

「If you do not use, we can only watch the Earth be destroyed。」

国連の内部は激烈な討論を展開した。

「Come on! Now a large number of

f e l i t e f i g h t e r s i n J a p a n , t h e
d e a t h h a s b e e n m o r e t h a n 9 8 % ,
w e n e e d t o w a i t u n t i l w h e n ? 」 光
石の父は感動して言います。

地面の上で、恋はようやく1つの地下室を探し当てて、よけて入っ
ていつて、彼女は体に全身傷で、泣いていますうちに…

1発のミサイルは落ちて下りてきて、恋は気づいていないで、突然
で、ある人は彼女の手を引き延ばして、彼女を救いました。

彼女はふり向いて、彼女を救う人がすでに地の上で意識がぼんやり
して倒すことを見て、走っていつて見ますと、意外にも光石です！
「光石さん？大丈夫なの？返事して…」

恋は泣いて彼を引っ張って地下室へ歩いていつて、この時、また1
発のミサイルは爆発して、彼女はかけらに弾かれて着いて、意識を
失いました。

大阪は、完全に壊滅されました。

第十二回：核兵器

勿論、相手も、死傷があります、尤も、少しだけ。地面に、大量な破片がある、この間、90%は、人間の飛行機の破片だ。

第1波は攻撃して、停止した。恋と光石は燃える都市の中で歩いて、探しています。

「あのう、何が探しますか？」恋は、質問した。

「残骸だよ」

「残骸？」

「ええ、宇宙人たちの宇宙船の残骸。」

「それ…何が…」

「まあ…」

「じゃ、あれは、宇宙船の破片でしょう？」恋はあつちを指していて言つて：「ほら…」

光石は、すぐに走っていきました。

「あつた！」光石は、凄く興奮なんだ：「これが有ったら…」

「どうした？」恋は、分からなくつて：「わい、そんな大きいですか…」

彼女の目の前で、直径は1キロメートルの宇宙船の残骸を上回ります。すでに半分の破損があつて、内部の構造ははっきりしてい分か

ります。

「彼らの構造に行くことを研究するのでさえすれば、武器システム、私達は反撃することができるんだ」

「それは、だよね。」

2人は飛行船の残骸に向かって歩いていきます。

この時、主な飛行船に：

「？亡多少了？」

「我方？失4艘？機、6人？死、8人重？、1人不治身亡。」

「人？…？」

「??? 数字超? 400万了、等我? 的援? 一到、??? 合??、便
可一?? 平地球。」

「?、停止攻?、各?? 回主船修整待命。」
「是!」

この飛行船のを指揮して、今年の50歳。プロキシマ・ケンタウリの第2惑星の1年に近くにあつて、地球の上の2倍です。彼らの寿命、人類の2倍で、だから、彼は人類の25歳の様子に相当する。彼は、少し悲しい気持ちがある、それは、彼は独り言を言つて下の都市を眺めて、言つて：

「我? 也没有? 法、? 是我?? 个? 族生存下去的最后希望了。我?
会保留?? 的基因、等有了? 当机会、就会重新克隆??、以保??
? 不会??、……」

「? 官、?? 什??」彼の話、1人の兵士に耳にさせました。

「?、没什?、我? 去看看各?? 的情况?!」彼らはコントロール室を出て行つて、負傷者の状況を調べる。

一方、人間の最後の核兵器は、その時、大阪に向かう途中。すでにほとんど壊滅した都市ですが、しかし放送システムが保存するのが完全だ。この時に警報の音が伝わつて来た：

「みなさん、核兵器は30分の内大阪に到着して、すぐに探して場所を避けることを下さい!」

「核兵器?」恋は、驚いだ：「どう、どうすれば、いいで、です、いいですか?」

「騒ぐないで! この近く、避難所があるはずだ。」

この宇宙船には、どこでも中国語で書くタグです、あまり人目を引かないひとつの小さい門の上は書いている：「防核避??」。

彼らは避難所を探している、核兵器は、その時、すでに東京湾に到着しました。

第十三回：200年前

「核兵器は、あと5分到着します！みなさんは、速く避難所に行こう！」

幸い、光石と恋は、ある古い避難所を見つけた、二人は、すぐに隠れて入っていきました。

核兵器は、来た！廃墟の都市の上空で、核兵器のミサイルは飛んできました。それは巨大な飛行船にぶつかります。

あの瞬間、数百平方キロメートル明るくしました。宇宙ステーションの上で、宇宙飛行士達ははつきり今度の核が破裂することを見た。地面はこのためにぶるぶる震えて、壊されるビル、瞬間粉末にもなる。

宇宙飛行士達は望遠鏡を通じて地面を合わせて、ほこりがだんだん地面についた後に、それでは巨大な飛行船は次第に現れてきて、少しすべて受けていないのが損だ。

落ち着いていて下りてきた後に、光石と恋は、地面に帰る、巨大な宇宙船は、はつきりしていて彼らの前に現れます！

「どういつ、どういつ、こと、どういつことですか？」光石は、驚いだ。

「さあ、核兵器は、無用だね。」

「まあ……」

ニューヨーク・国連本部：

「It's no work！」

「What?！」

「Alien spacecraft still！」

「Oh, My God！」

...

役に立たない攻撃、結局自分の死傷をもたらす。それは、一番良くない結果だね。

光石と恋は、歩いて、突然、地下室に落ち込みました！

「イツテッ…」

「大丈夫ですか？」

「うん、平気で、です…」

二人の目の前、ひと山のコンピュータが現れました。

「なんだこりゃ…」光石は：「コンピュータ室？」

「違うとおもうわ…」恋は：「見て、ここは、ずい分古かったね。20センチの液晶ディスプレイ、」彼女は、一つ開けた：「わあ、ウィンドウズセブンだわ、ということは、2010年ぐらいかな。」

「じゃあ、200年前の？」

「ええ、恐らく、ほら、4つの核のシーピーユー…」

「わあ、本当に遅いな、今は、全部1000核以上だろうな。」

「ええ、液晶ディスプレイも無い無かった、3次元のホログラフィは表示すりますわ。キーボードも無い無かった。脳は、直接で、コントロールします。科学技術の進歩、アタシたちは、もう、こんな古いコンピュータの操作方法が忘れちゃったわ。」

「いいえ、そうじゃないですよ、僕は、こんな古いコンピュータを操作することができますよ！」光石は、コンピュータの側に歩いて、キーボードを引き出します。操作し始めることを始めます。「まっち？」恋ちゃんは驚いた！だって、23世紀の人々は、ほとんど以前のコンピュータのことを忘れた、なのに、なぜ光石は、できるんですか？

「あのう…」恋は、言つて：「何をしているんですか？私達は、どうすれば良いですか？」

「シーー見つけた！地球を助ける方法が…」

「えっ？ほんまに？」

「そうや、200年前、自衛隊の究極の武器が、見つけた！」

第十四回：地球を守る

2145年、米国は日本から軍隊を引き揚げます。自衛隊は再び創立して、人数は3万から30万になって、日本を引き続き守っています。

廃棄の自衛隊の兵器庫で：

「どうしてそんな長い時間で、電気がある？」

「さな、誰が、なんの目的で、ここに、引き続き運営します。」

「誰で…」

「隠れで！」恋は光石を引っ張って、隠れました。

遠くないところ、2人が歩いてきて、彼らは言います：

「あの物、本当にあるですか？」

「はい、間違いありません！」

「でも、本当に出来るんか？」

「絶対に出来る、だが、宇宙人を粉碎しましたと同時に、同じく半分の地球に壊滅します。」

「何です？半分の地球？」

「はい、空中が爆発を生む同時に、同時に同じく燃える大気圏、直径の1000キロメートルの範囲は影響を受けます。」

「それじゃ、日本は…」

あの人、頭を振ります。

「他の方法がないでしたか？」

「ええ、それは、唯一な方法だ。」

「ああ、そうか。じゃ、やりましょう！」

「はい！」

彼らが1台のコンピュータに歩いてつく前に、操作を行つつもります。

「待って！」恋は後から跳んできて、言って：「やめて下さい！そうしたら、日本は、いいえ、全世界、全世界はいずれも壊滅します

！」

「誰なんだ、おめえ！」

「わたくし、三上恋でございます！何が問題があるの？」

「しかし、そうしなければ、私達は、同じ運命だぞ、また分からないですか？宇宙人は、わ我々地球人を全部殺したい！」

「あんたあほうか？もしそうしたら、自殺だよ、先聴いたろう？彼達の宇宙船は、核でも怖くなかった。そうすれば、無用さ！」

「おめえ、なにか分かるですか？」あの人と言つて：「もし人類はすべて壊滅するならば、すべてはありますどんな意味です？」

「まあまあ、もう一つ方法がある、でも…」

「何が？速く言つて！」恋は、凄く知りたいだ。

「こつちに行つて。」

みんなはあの人に従つて地下3階に来ました。

「見て、それは、2160年製の宇宙船です、あなたはこの飛行船に乗つて、この精密な起爆装置を植えて宇宙人の飛行船に入つて、彼らの1回限りの解決ことができるんだ。」

光石は：「そう、じゃ、恋ちゃん、私も行きます！」

「二人待つて！」

あの人語気は重々しく言つて：

「あの爆発の瞬間、お前ら…」

「詰まり、戻らないでしょうか？」

「は、はい…」

「よし、分かつた、恋ちゃんは、ここに残る、僕一人で行きます！」

「ちよつと…あたしも一緒…」

「バカ言つんな！1人が死亡するのはいつも2人より良いんだ。」

「ダメよ、これは、あたしのアイデアなのに、なぜ光石君までも…」

「バカろう！僕は、地球人だぞ、以前、自衛隊に入りたい、日本のことを守つてあげたい。それは、我々日本人の責任だろう。今回は、地球のことを守る、同じ我々人間の責任だぜ。さあ…」

「私も人間です！だから、絶対に行きます！」

「恋ちゃん、おめえ…分かった、じゃ、一緒に、地球を守る！」

第十五回：最終行動

1月2日、最後の決戦は、あと一日：

2人は飛行船に上がって、飛行船のスタートの後で、地下3階から飛び始めて、上の2層の床板は落ち込んで、ついに地面に着いた！
恋は：

「光石君、あたしの腕時計は落ちて、少し拾うように手伝うことができますか？」

「ああ、はい。」光石は手を伸ばしていつて拾って、恋は飛行船の扉を開けて、光石を出した！

「恋ちゃん！」光石は大声で叫んで、恋は扉を閉じて、エンジンを始めて、宇宙船に向って飛びたちます。

「ああああ！」光石は大声で叫びます。

「聞こえますか？」通信器の中で恋の音が伝わって来た。

「恋ちゃん？何をしているんですか？」

「ごめん、あなたは正しくて、死亡の人は少なければ少ないほど良くなる。」

「くっそ！今何処だ？」

「えっと、宇宙船までは、あと1143キローそうです。」

「すぐ戻れ！あんなどんな操作ができないでしょうか。」

「あたしは大丈夫、安心してください！すると、あの人と話したい。」

光石は通信器はあの人に手渡します。

「指示してください！」

「まず、この赤いボタン……」

恋は宇宙船の近くに飛んで、強い力の爆弾のインスツールを行うつもりで、しかしこの時、宇宙人は彼女を発見した！

「船？、有？船？？来了。」

「地球人的？」

「好像是的。」

「？它那破船，好像几百年不用了，外？？？着？？多灰……」

「哈哈哈哈哈……」

「？去，把他？我抓来。要留几个地球人做？本，」

「是！」

巨大な宇宙船は小型の飛行船を派遣して、恋を迎えにきます。

「恋ちゃん！気を付けて、宇宙人の小さい飛行器が来た！」この時、宇宙人の飛行船はすでに恋の飛行船を捕獲して、そして主な飛行船のドアーズを開けて、「食べて」しまうつもりです。

恋はこのような状況を見て、その押しボタンを押さえつけて、強い力の爆弾の時間を決める爆発の押しボタンがで、深く息を吸い込みます。

あと10分、爆弾は、爆発！爆発したら、100平方キロメートルの範囲はすべて焦土に変わります！

「光石君、逃げろ！」

「ど…どうやって？」

「ああ、そうだ、この近く、空港がある、自衛隊専門空港だ、行く！」一人言って。

「恋ちゃんは？」

恋は泣いて言って：

「あたしは平気だわ、先に逃げろ！速く！」

「うん…」Bはうなずきます。

恋は通信器を閉じて、言って：

「さようなら、光石君。」

あと4分！

その時、恋はすでに宇宙人の飛行船を身に付けられて、彼女はキヤプテンの目の前に連れてこられます。

「船？、就是？！」

「？叫什？名字？」

恋は：

「あと3分、アンタたちは、お終いだ！我々地球に、出て行け！」
飛行船は翻訳システムがあつて、自ら彼女の話を読んだ後に、放送してきました：

「？有3分？。。。就完了。。。从我？地球？出去！」

「。。。什？？」

「あははは、2分半、29秒、28秒：あんた達のここで爆弾を詰めました、ああ、2分、1分59秒…」

「？、去？？一下！」

恋は得意げな笑顔を現しました。

「船？、系？？描到？力炸？、已？来不及解除了！」

「什？？有？？事？」

「是的。。。有1分爆炸……」

「什？？！」キャプテンは恋を見ていて、憤慨したのは話を口に出せないでにくる。「。。。？！」

恋は、笑う：

「あははは…」

光石はヘリコプターの中で乗って、あの2人と彼は言います：「私はとても申し訳なくて、あなたの友達は命を捧げました。これは地球の上で最後に1枚の強い力の核爆弾で、すでに地球の上ですべての核燃料を消耗し尽くしました。」

「そうか。」

「はい、もし宇宙人は再度地球に進撃するならば、地球の上にすでに使うことができるいかなる武器がありませんでした。」

「はは、それは、発生することがありませんだろうな。」

「恋ちゃん…」光石は、凄く悲しいんだ。

爆弾は爆発して、ヘリコプターも強烈な振動を受けます。宇宙人の飛行船は爆撃された粉碎です、飛行機の上の2人は手をたたいて喜びます！

「やった！やりましたね！」

「よし、気持ち悪い宇宙人達、去らば！」

光石は：

「去らば、恋ちゃん…」彼は涙を流しました。

恋は窓の上で伏せて、巨大な他の星の飛行船を見ていてかけらが破裂して、しかし彼女はべつにとっても楽しくありません。なぜかという、彼女はこの時小さい飛行船の中で拘禁されて、次第に地球を離れて遠く去ります…

飛行船の放送：「？船、正在以98%光速航行、返回比？星系、？
？2小？候到？。？在、光速引？正在？？、？各位回到座位上、并系好安全？……」

10分後、恋は千個以上の飛行船が地球に向って飛びたつことを見ます…彼女は周囲をちよつと見て、彼女の乗った飛行船は土星の星の環を通り抜けています…

3年後：

ある日、カナダ・オタワ：

「Look！What's this？」

「Oh，My God！」

最初ひとつ、それから千個以上飛行船は世界各地で訪れます…

第十五回：最終行動（後書き）

この小説はフィクションです。
ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463m/>

二二一〇

2010年10月13日16時04分発行